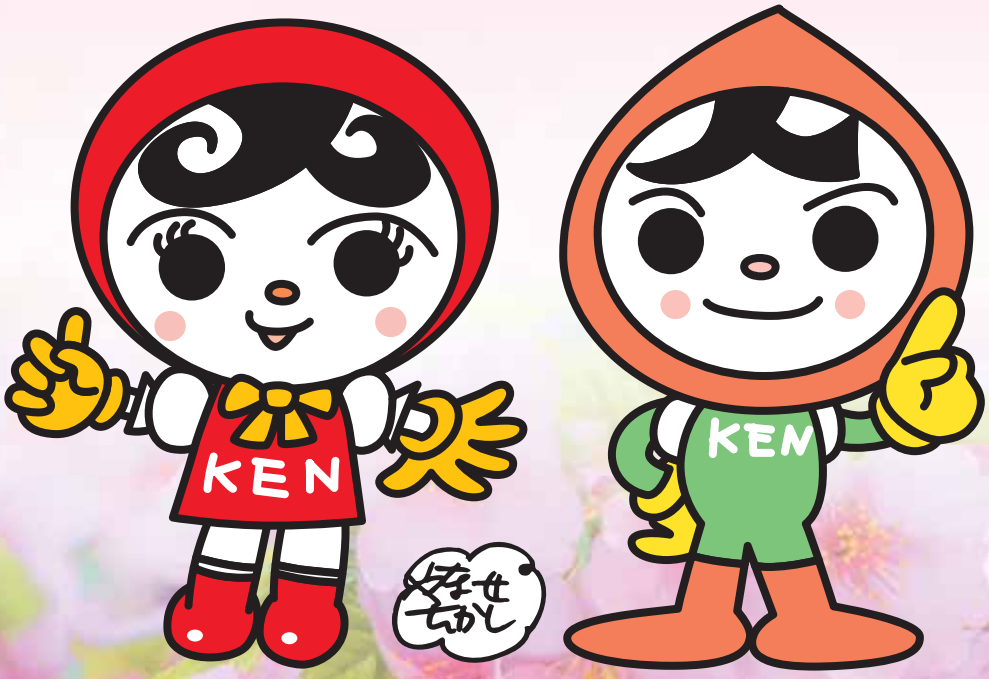
令和六年度

中学生人権作文集

（第43回全国中学生人権作文コンテスト静岡県大会）



人権イメージキャラクター
人KENあゆみちゃん

人権イメージキャラクター
人KENまもる君

静　岡　地　方　法　務　局
静岡県人権擁護委員連合会

法務省人権擁護局長
全国人権擁護委員連合会会長　感謝状贈呈校

令和元年度

川根本町立中川根中学校
沼津市立池二中学校
沼津市立第三中学校
三島市立熱海中学校
御殿場市立熱海高校
伊豆市立土肥中学校
清水町立清水小学校
長泉町立北一貫校
裾野市立富士高校
富士市立富岡中学校
富士宮市立鷹岡中学校
下田市立下田中学校
下田市立稲生沢中学校
東伊豆町立稲取中学校
東伊豆町立熱川中学校
河津町立河津中学校
南伊豆町立南伊豆中学校
松崎町立松崎中学校
伊豆市立東伊豆中学校
西伊豆町立西伊豆中学校
浜松市立開誠中学校
浜松市立与進中学校
浜松市立館山中学校
浜松市立篠原中学校
浜松市立三方原中学校
浜松市立細江中学校
浜松市立新日中学校
浜松市立三ヶ日中学校
浜松市立東陽中学校
浜松市立篠原中学校
浜松市立中郡中学校
浜松市立中川崎中学校
浜松市立城明中学校
磐田市立山中学校
磐田市立神岡中学校
湖西市立栄中学校
掛川市立掛川中学校
掛川市立掛川中学校

令和三年度

掛川市立菊川中学校
焼津市立焼津中学校
島田市立島田中学校
島田市立金谷中学校
東伊豆町立東伊豆中学校
伊豆市立伊豆中学校
伊豆市立伊豆中学校
伊豆市立中門野中学校
清水町立清水中学校
伊豆の国市立中大仁中学校
伊豆市立天城中学校
南伊豆町立中伊豆中学校
市立中学校
浜松市立曳馬中学校
浜松市立塚久神中学校
浜松市立雄踏中学校
浜松市立星北中学校
浜松市立佐引中学校
浜松市立南窪中学校
浜松市立部水中学校
浜松市立聖隷クリストファー中学校
浜松市立森町中学校
静岡市立静岡学園中学校
牧之原市立蒲原中学校
焼津市立小川榛原中学校
沼津市立金岡中学校
沼津市立小川中学校
富士宮市立西中学校
富士宮市立上野中学校
富士市立北伊豆中学校
浜松市立南部中学校
浜松市立浜南中学校
浜松市立中部中学校
浜松市立函南中学校
浜松市立八幡中学校
浜松市立南西中学校
浜松市立函南中学校
浜松市立白須賀中学校
浜松市立春野中学校
浜松市立湖西中学校
浜松市立浜名中学校

令和四年度

令和五年度

令和六年度

浜松市立庄内中学校
浜松市立浜北北部中学校
浜松市立清竜中学校
浜松市立佐久間中学校
袋井市立周南中学校

中央大会推薦による同感謝状贈呈校

令和元年度　静岡大学教育学部附属浜松中学校
静岡大学教育学部附属島田中学校

令和三年度　浜松市立北部中学校
長泉町立長泉中学校

令和四年度　三島市立中郷西中学校

令和五年度　静岡県立浜松西高等学校中等部
焼津市立小川中学校

令和六年度　浜松市立高台中学校
浜松市立北部中学校
長泉町立長泉中学校

※　法務省人権擁護局長・全国人権擁護委員連合会会長感謝状は、作文コンテストに多数の応募をいただいた中学校及び中央大会へ推薦された代表作品の応募者が在学する中学校などに対して、中央大会の主催者から贈呈しているものです。
〈過去5大会について掲載しています。〉

第四十三回

全国中学生人権作文コンテスト

静岡県大会入賞作文集

静岡地方法務局
静岡県人権擁護委員連合会

はしがき

基本的人権とは、だれもが幸福な生活を送るために一人一人が生まれたときから平等に持っている大切な権利です。そして、この人権が守られ、尊重される社会をつくるためには、国民一人一人が、人権とは何か、人権の尊重とはどういうことかということを真剣に考え、日常生活の中で、それを不断に実行していく努力をしなければなりません。

法務省と全国人権擁護委員連合会では、人権尊重思想の普及高揚を図るために様々な啓発活動を行っており、その一環として昭和五十六年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施し、本年度で四十三回目を迎えました。この作文コンテストは、次代を担う中学生に人権問題について作文を書いてもらうことによって、人権尊重の重要性、必要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身につけてもらうことを目的として実施しているものです。

静岡地方法務局と静岡県人権擁護委員連合会では、毎年、同作文コンテストの静岡県大会を実施しています。本年度は、県内の中学校一五五校から七、二七九編に上る作品が寄せられました。その内容は、いじめ問題を中心とした子どもの人権問題に関するもの、ＬＧＢＴＱに関するもの、障害のある人・高齢者・外国人に関するもの及び戦争や平和に関するものが多くありました。御応募いただいたいずれの作品も人権問題を正面から受け止め、それらを中学生の純粋な目で観察し、自分はどうあるべきかを力強く語っているものばかりでした。

学校の勉強や部活動等で多忙な日々の中にありながら、「人権」の大切さに思いをめぐらせて御応募いただいた中学生の皆さんに深く感謝いたします。

この作文集は、静岡県大会に寄せられた作品の中から選ばれた十九編を収録したものであり、この作文集を一人でも多くの方々に読んでいただくことで、人権尊重の輪が更に大きく広がることを願ってやみません。

結びに、今回の人権作文コンテスト静岡県大会の実施に当たり、多大な御支援、御協力を賜りました静岡県教育委員会、市町教育委員会、静岡県私学協会及び各中学校並びに株式会社静岡新聞社、静岡放送株式会社、日本放送協会静岡放送局、株式会社エスパルス、株式会社ジュビロ、株式会社藤枝ＭＹＦＣ及びアスルクラロスルガ株式会社等の関係者の方々に対しまして、厚く御礼申し上げます。

令和七年二月

静岡地方法務局長　**宗野有美子**

静岡県人権擁護委員連合会会長　**津田　薫**

〈令和六年度審査員〉（順不同敬称略）

静岡県教育委員会教育政策課人権・教員育成室長　中山靖子
株式会社静岡新聞社編集局社会部長兼論説委員兼編集委員　鈴木誠之
日本放送協会静岡放送局コンテンツセンター長　長尾吉郎
静岡地方法務局長　宗野有美子
静岡県人権擁護委員連合会会長　津田　薫
静岡県人権擁護委員連合会男女共同参画社会推進委員会委員長　青木　修
静岡県人権擁護委員連合会こども人権委員会委員長　原田幸男
静岡県人権擁護委員連合会高齢者・障がい者人権委員会委員長　鈴木キミヱ

目　次

◇**最優秀賞（静岡地方法務局長賞）**
私たちは人だからこそ想像できる……浜松市立北部中学校　三年　小倉綾那……6

◇**最優秀賞（人権擁護委員連合会会長賞）**
「自分らしく」生きること……長泉町立長泉中学校　三年　青木玲奈……10

◇**特別賞（静岡県教育委員会教育長賞）**
私を例に……浜松市立新津中学校　（匿名）……13

◇**特別賞（静岡新聞社・静岡放送賞）**
「小さい」……掛川市立大須賀中学校　三年　名倉由奈……16

◇**特別賞（ＮＨＫ静岡放送局賞）**
ハンディキャップを抱えていても……富士市立岳陽中学校　一年　西尾優我……19

◇**特別賞（清水エスパルス賞）**
偏見は怖い……森町立森中学校　三年　萩原大惺……22

◇**特別賞（ジュビロ磐田賞）**
特別は特別ではない……浜松市立庄内中学校　三年　徳増藍……26

◇**特別賞（藤枝ＭＹＦＣ賞）**
「捉われない」にとらわれない……静岡大学教育学部附属浜松中学校　二年　磯貝咲歩……29

◇ 特別賞（アスルクラロ沼津賞）
人権とは？……伊豆の国市立大仁中学校　二年　村上　慶……32
◇ 奨励賞
差別とは偏見……吉田町立吉田中学校　三年　（匿名）……35
『助けて。』を言えない人へ　……牧之原市立榛原中学校　一年　高塚　利々……38
誹謗中傷のない世界に……沼津市立門池中学校　三年　杉原　帆乃花……41
思い込みから人権を守るために……清水町立南中学校　二年　米山　翔……44
思いやりの架け橋へと……富士市立岳陽中学校　一年　山﨑　大……47
弟……南伊豆町立南伊豆東中学校　二年　臼井　悠人……50
私にできることから……松崎町立松崎中学校　一年　山本　美月……52
障害という名の個性……浜松市立佐鳴台中学校　三年　髙橋　奏名……55
支え合って生きていけば……掛川市立大須賀中学校　三年　山下　志帆……58
思いやるということ……森町立森中学校　三年　森田　健心……61

注　原文を忠実に再現することを基本としていますが、編集者において、誤字、脱字等の訂正をしている箇所がありますので、あらかじめ御了承願います。
なお、編集にあたっては、本人の了解を得て掲載しております。

最優秀賞

（静岡地方法務局長賞）

私たちは人だからこそ想像できる

浜松市立北部中学校
三年　小倉　綾那

人権という言葉を聞いたとき、私は、高齢者や子ども、障がいのある人、妊婦さんや赤ちゃんを抱いている人たちの方へ意識を向けていた。その人たちが、生きづらさを感じたり、肩身の狭い思いをしたりすることのない社会であるべきで、そのためにいろいろな法律や設備や環境が整備され、平等を目指しているのだと思っていた。

ただしそれは、一方通行では成り立たないのではないか、と思う出来事があった。

バスに乗って発車時刻を待っている間に、車椅子の人が乗り場にやって来た。運転手さんは乗車口に板を取り付け、スロープ状にしてから車椅子を車内へ押した。車椅子の人にも周囲の人にも声をかけ、安全を確認しながら対応していた。それは私にとって初めて見た光景ではなく、以前も何度か見かけたことがあった。きっと、公共交通機関の乗務員さんは、安全な対応ができるように訓練しているのだと思う。

ところが、その日は車椅子を固定するためのベルトが届かず、調整する必要があった。私を含め他

の乗客は、邪魔にならないように静かにその場を見守るしかなかった。
すると、車椅子の人が困ったように「もういいよ、大丈夫」と言った。それを聞いて、私はもやもやした気持ちになった。固定されなければ転倒のリスクがある。もしその先に人がいたら、その人たちも怪我をするかもしれない。なぜ大丈夫だと言えるのだろう。
運転手さんは「申し訳ありません、もう少しですので」と作業を続け、固定を確認してから発車した。
別の日にお店でレジに並んでいると、会計中の男の人が急に声を荒げた。びっくりして思わずそちらに目を向けると、その人は高齢者ではないが、杖をついていた。持ってきた袋に会計済みの商品を入れてほしいと頼んだようだった。レジ係の店員さんは「ご自身で袋詰めしていただくように皆さんにお願いしています」と説明していた。そのときに声を荒げて言ったのだ。「それができないから頼んでいるのだ、わからないのか」と。
私はまたもやもやした気持ちになった。そのようにこちらも説明すればよいのに、なぜ声を荒げる必要があるのだろう。
インターネットで調べてみると、店員が袋詰めしてくれない、という不満の声は確かに多い。一方で、検索エンジンの中に消費者庁の「お買い物エチケット」という資料を見つけた。感染症防止対策を踏まえた内容になっていたが、そこには「マイバックへの袋詰めは自分で」と書かれていた。
大人になったら私たちも社会でそれぞれの役割を持ち、それが仕事なら、安全や品質などを守るための行動が求められると思う。あのときのバスの運転手さんや店員さんも、責任をもって仕事をしていたに違いない。それに対する否定的な言葉を聞いてしまったので私はもやもやした気持ちになった

のだ。

でも、対面側から時間の経過を振り返ってみたらどうだろう。車椅子でバスを利用していた人の立場では、もういいよ、と言ってしまいたくなる気持ちも想像できる。そこに居合わせた私たち乗客が注目していたのだ。もちろん私たちに悪意はないが、人にじろじろ見られるのは、きっと居心地が悪いと思う。バスは定刻で運行する。それが自分への対応のために遅れてしまう心配があれば、やはり気持ちも落ち着かなくなるだろう。

レジで見かけた男の人は、杖で身体を支えていた。片手でその杖を持ち、もう片方の手で支払いから袋詰めまでをするのは大変だと思う。さらに、レジには列ができていたので順番を待つ人のことを思えばこそ、早く済ませようと焦ってしまうだろう。

レジ袋の有料化前までは、また、コロナ禍以前は、そんな袋詰めの心配は無かったかもしれない。社会の仕組みが変わっていく一方で、自分がその変化に対応できなくなってしまったら、とても困るし悲しくなると思う。

その人は袋詰めされた荷物を受け取り、今度は「ごめんね」と繰り返してお店を出た。

全ての人が同時に、自分の生活を守りながら暮らしている。生活の中には誰かの仕事によって成り立っていることや、手元に届いているものが本当に多い。そのようにサービスを提供する側と受ける側の立場が入れ替わりながら回っていると思う。だから、社会の中で特定の誰かが常に気を遣い、心理的な負担を抱えたり、物理的な我慢を強いられたりすることなく、もし自分の要望がかなえられたら、そのときには「ごめんね」ではなく「ありがとう」と言い合えればいいと思う。

誰もが暮らしやすい社会は一方通行では成り立たない。年齢も、性別も、生い立ちも関係なく、私たちは等しく相手の立場を想像する力を持っていると信じている。

最優秀賞

（人権擁護委員連合会会長賞）

「自分らしく」生きること

長泉町立長泉中学校
三年　青　木　玲　奈

「人間が自分らしく生きるための、生まれながらの権利」それが、「人権って何？」と質問をした、私への回答だった。私は「自分らしく」という言葉が好きだ。自分と相手が違うのは当たり前、自分と同じ人間は一人もいない、だから自分を自分自身が認め、大切にしよう、そういう考え方が好きだ。

あなたは「男の子がスカートを履いているのは変」だとか「女の子なら男の子とばかり遊ぶのはやめなさい」と思いますか？私は思わない。思いたくない。それが「個性・自分らしく生きる」ということだからだ。小学六年生の冬、私はとてもわくわくしてその朝を迎えた。中学校の制服を、親と一緒に見に行ったのだ。でも、帰り道の足取りは重かった。今は多くの学校で制服が新しくなり、ズボン、スカート、ネクタイ、リボン、自分の好きなものを選択できるが、そのとき私の学校ではできなかった。店員は当然のことのようにスカートを持ってきたけど、本当はズボンが履きたかった。別に、その店員が悪いわけではない。ただ、スカートが好きではなく、小学校はズボンで通っていたから、中学校でも自由に選べるものだと勝手に思っていたのだ。「スカートよりズボンがいい」そう言いた

かったけど、「女の子はみんなスカートだから」という言葉によって、私の気持ちは心の奥へと追いやられてしまった。意見を言うことすらできなかった。そのときの私は「みんなと違う」がとても怖かったのだ。

中学校に入学し、新しい生活に慣れた頃、部活動見学が行われた。みんなが楽しみにしていたけど、私は一人憂鬱だった。入りたい部活がなかったからだ。いや、あったけど勇気がでなかったのだ。見学最終日、やっと勇気を振り絞りグラウンドに行った。「先輩、サッカー部に入りたいんですけど、女子でも入れますか？」とてつもない緊張と恐怖だった。今までに「女子だから無理」と断られた経験があったから、どうせまた、と心のどこかで思っていたのかもしれない。だけど、私が質問した先輩は「前例はないけど、入れるんじゃない？顧問の先生に聞いてみるよ」と目を合わせて言ってくれた。「女子が？」と馬鹿にせず、真剣に答えてくれたことが、私はとても嬉しかった。後に、顧問の先生にも許可を得ることができ、私はサッカー部へと入部した。もちろん女子は一人だったし「なんで女子がいるんだよ」と笑われることもあったけど、男女関係なく接してくれる仲間との部活動はとても楽しくて何よりも好きだった。サッカーは他のどんなスポーツよりも、私にとっての「自分らしい」だった。進級すると、後に続くように女子が入部した。次の年もだ。「先輩がいたから入りました」後輩は言った。私はなぜか泣きそうになった。あのとき勇気を出せて本当に良かったと、今でも強く思う。

中学校に入学して、「人と違うことが怖い」を「人と違うなら、自分自身を大切にしよう」に変えた。私の行動が他者にも影響を与えると気づいたからだ。そして、自分が知っている知識を発信する

ようにした。今までに関わった男女差別やいじめ、ＬＧＢＴＱなどについてだ。男女差別やいじめはよく知っているけど、ＬＧＢＴＱに関しては、言葉はよく聞くけど詳しくは知らない、というのが今の中学生だ。私は、友人に相談されてからもっと詳しく知りたいと思ったことをきっかけに、図書館やインターネットを利用してたくさん情報と出会った。中には間違った情報もあったから、「すべてを信じないで」ということと「その人たちは私たちと全然違わない」ということを知っておいてほしい。私の友人は私と何も変わらない。私たちと同じように「自分らしく」生きているだけなのだ。だからもし偏見を持っているようなら、一冊でいいから関連する本を手に取ってみてほしい。あなたの考えは大きく変わるはずだから。

「世界中は難しくても、私や私の周りの人が、自分らしく生きられるようにする」それが今の私の目標。これは、必ず目標から現実にする。「〇〇が好きって変」とか「キモイ」とか、最近はよく聞くけど、そうやって簡単に他者の個性を否定しないで、「君らしくていいね」と言い合える世の中になってほしい。私はそれをみんなで作っていきたい。

最後に、もしあなたが「自分らしく」生きられていないことに苦しんでいるのなら、まずはあなたの「自分らしい」を見つけ、心の奥の勇気に触れてみてほしい。私が、一歩踏み出すことで自分らしい道を進めたように、あなたなら必ず変われるから。そして、絶対に自分を責めないでほしい。この作文で私があなたに一番伝えたいこと。それは「他者の自分らしいを否定しないで。そしてあなたはあなたらしく生きてください」ということ。

特別賞

（静岡県教育委員会教育長賞）

私を例に

浜松市立新津中学校
（匿　名）

中学校一年生の総合的な学習の時間、自分の人生設計をする授業のこと。プリントに、「十五歳、中学校卒業」からスタートし、高校入学、大学受験、資格取得などを書いていく。私も、自分の将来を想像することに心を踊らせていた。そんな中、同性愛者である私は「結婚」と書くことだけは、書くのをためらった。なぜなら、日本では「同性婚」が認められていないからだ。今、国で認められていないことを書くことは腑に落ちないが、私が大人になる頃は同性婚が認められていてほしいという願望も踏まえて「二十六歳、結婚」と書いた。

私はその後、日本の同性婚に関することを調べた。すると、同性婚を認めないことは憲法違反と訴え、国と争う人々や、日本に「同性パートナーシップ」という制度があることを知った。その「同性パートナーシップ」は、各自治体ごとに導入されており、私の住んでいる市にもあることが分かった。結婚に相当する関係のカップルに証明書が発行され、入居時や、病院での面会時などに家族として受け入れられたり、家族割が使えたりするという。結婚との違いは、法的な効力がなく、遺産相続など

ができないそうである。二つを比べて、同性パートナーシップにもかなりの効力があると気付いた。それでも同性婚が法律で認められると劇的に世間が変わると思う。今よりもっとＬＧＢＴＱに寛容になるだろう。

私の同級生や先生は、すでに寛容的であると思う。私が同性愛者だということを、周りの友達に気付かれるときは、俗にいう、恋バナ（恋愛話）をしているときだ。話題に好きな人とか好きなタイプとかが上がる。私は口が軽く、不意にいろいろと話してしまう。また、相手から質問されると答えてしまう。そして、私が同性愛者であることを相手は知る。その時に、差別的な発言や、不思議に思われることはない。驚かれることはあるが、よく考えてみれば、私の好きな人が異性でも同性でも変わらないことである。あえて同性愛者であることを言おうと思ったことも、隠そうと思ったこともない。ただ家族を除いては。父と母にはぼかして伝えてあるが、きっと確信していると思う。私は男性が好きだと伝えたい気持ちはあるのにどうしても言葉がつまってしまう。母と好きな人とかそういう話になったときは、内心ひやひやしながら女性が好きなのか男性が好きなのかと問われる前に話を収束させている。最も同性愛者であることを伝えづらいのは祖父である。小学生のときから「なよなよするな」「男らしくしろ」などと言われてきた。学校生活で受け入れられていても、家族から受け入れられるのは難しい。私の思うＬＧＢＴＱへの理解とは、自分の家族や親友がカミングアウトして、気付いたときに、すんなりと受け入れられるかどうかだと思う。ＬＧＢＴＱは多種多様であり、興味深いと思うこともあるだろう。「ゲイ、バイセクシュアル、レズビアン」や「ノンバイナリー、トランスジェンダー」などカテゴリに分類することができる。私を例にすると、私は男であり、同性愛者であ

り、趣味は、化粧をすることだ。これを細かく分類することは、ＬＧＢＴＱの理解を進めるためには無意味である。また、分類されることで気分を害す人もいると思う。大切なのは、「柔軟に受け入れる」こと。そのためには体の性と性自認が同じで、恋愛対象は反対の性という普通や、同性愛者は異性になりたいという偏見を意識的になくすことが不可欠であるだろう。私が役員をしていた昨年度の生徒会執行部では、「ＬＧＢＴＱの理解」を推し進める活動を行ったらどうかと議論されていた。その活動は結局、どう生徒へ向けた活動を行えばよいのかが難しいという理由で行われなかった。それでも私はよいと思っている。ＬＧＢＴＱとはなにかを説明したり、ＬＧＢＴＱの本を紹介することも意味があると思う。しかし、先程の柔軟な受け入れを助けるためには、身近に当事者がいることが一番だと考える。

私が同性婚を国に認めてもらうためにできることはゼロに近いかもしれない。一つ、私ができることは、自分がＬＧＢＴＱであり、同性愛者であることを隠さず生きていくこと。中学校内、高校と出会いが広がるにつれて、差別や偏見にぶつかることだってあるはずだ。それでも、私を受け入れてくれたこの学年の人たちのように少しずつ寛容的な社会になってほしい。あの時に書いた「二十六歳、結婚」が本当にできると信じている。私は、生まれ育った日本で、すてきな人と結婚したい。好きな人を別の人におきかえてごまかすより、恥ずかしがらず、好きということを伝えることが、私の幸せな結婚につながるから。

特別賞

（静岡新聞社・静岡放送賞）

「小さい」

掛川市立大須賀中学校
三年　名倉　由奈

世の中には背が高い人もいれば、背が低い人もいます。私は生まれた時から体が小さく、親からの遺伝による低身長症で身長が普通の人よりもかなり小さいです。そんな私は周りの人たちに「小さい」「チビ」「小さいから無理だね」などを幼い頃から言われ続けています。だから私は今までずっと背が低いだけで友達からバカにされたり、見下されたりしています。背が低い人を年下扱いする、体格でその人のことを決めつけることをなぜするのでしょうか。どう頑張っても、どんなに努力しても、これ以上背を伸ばすことはできません。

この世界は背の高さで人間の優劣が決まると思ってしまいます。物語やアニメは、背の低い人がバカにされても頑張っている話が多くあります。あと、洋服や靴など小さいサイズがほとんどのお店で販売していません。中学校に入学する時の通学用靴は一番小さなサイズが22㎝で私はそれより小さいサイズだから中敷きを入れて合わせています。小さいといろいろと生きにくいです。

学校は移動する時や全校集会などで背の順に並びます。背の順を当たり前に並ばさせていて、それ

が普通になっています。私は学年で一番背が低いので、毎年クラス替えをしても一番前に並ぶことが当然のように決まっています。私は背の順で一番前になることが本当は嫌です。学校生活の背の順で並ぶという決まりは、人権を脅かしていて、身体的特徴による差別だと思います。なぜ背の順は差別なのに問題にならないのでしょうか。

背が低い以外でも、見た目だけで傷つけられている人はたくさんいると思います。そういう人たちに、他と多くの人と異なるささいな点を言うことは、相手の立場や気持ちを思いやる意識がないと思います。他人への思いやりや弱者に対するいたわりが欠けています。そして人は自分よりも劣っていたり、できなかったりする人をバカにしたり、見下したりすると思います。私はそれぞれの短所を否定するのではなく、お互いの長所や短所を認め合い、受け入れ合いながら人と関わり、人間関係を作っていくことが差別のない良き社会を作ると思います。見た目や雰囲気がみんなと違うという固定観念をなくし、お互いを正しく理解して自分自身で考えて行動することが、見た目による差別をなくすとは思いませんか。一人一人が個性的でいい、個性は皆違う、それぞれ魅力があって当たり前、だから私たちは皆価値があると思います。

私の母は日本女性の平均身長158㎝で母よりも背の低い父と結婚しました。この作文を書くのをきっかけに、父との身長差のことを聞いてみました。母は

「そんなこと気にしない。どうでもいい。お父さんはとても優しい人だから。」

と言いました。父も自分の身長のことは何も気にしていません。そんな両親は確かにとても仲が良くて幸せそうです。お互いに尊重し合うパートナーを見つけてうらやましいです。小学生の時に、学校

で同性愛のことについての教育を受けました。それを母に言ったらすごくびっくりしていました。そして母は、

「良い世の中になったね。」

と言いました。幼稚園や学校で、もっと人権の教育をして体格や障害、国籍などで苦しんでいる人をなくしてほしいです。きっと今より豊かな社会を築けると思います。

「人権」とは全ての人が生まれた時から平等に持っている権利で「人間が人間らしく生きる権利」「人が幸せに生きる権利」です。みんなが持っている人権を尊重し合い、認め合うことが人権意識につながります。難しくはない「思いやり」や「いたわり」などで心を感じ理解できるものです。そして今、差別されている体格の人、障害がある人、トランスジェンダーの人、肌や目の色が違う人がいると思います。私は今まで傷ついてきたからこそ気持ちがわかります。だからこの作文を通して「みんな地球に住んでいる同じ人間で何も違わない」と伝えたいです。

私の背は小さいですが、それを見下したりする人の心はもっと小さいです。偏見や差別に負けない。私らしく生きていく。

特別賞

（ＮＨＫ静岡放送局賞）

ハンディキャップを抱えていても

富士市立岳陽中学校
一年　西尾　優我

行き交う人々すべてに、人権はある。だが一括りに、人間として幸せに生きていく権利といっても、ハンディキャップを抱えて生きている人達も、幸せに生きていけるのだろうかと思った。

僕の妹は、自閉症という障害をもっておりあまり会話もできない。危険という認識も、乏しいため高い所へ登ってしまったり、外へでても飛び出してしまう事が多いため、お母さんが、いつも手をつないで歩いている。そんな母を見て、近所の人は「大変だね。かわいそうに。」と声をかける。妹の存在は、世間から見た時「かわいそう。」となるのが、僕には不思議に思えた。元々、健常者だった僕の祖父が、脳こうそくで左半分が不自由になり車いす生活を送るようになると、「病気だから仕方がない。年だから仕方がない。」と周りは言った。だけど生まれてもった障害がある妹には「かわいそう。」と声をかける姿に、僕は違和感を覚えた。同じように、日常生活にハンディキャップを抱えていても、生まれつきと言うだけで、周りの捉え方が違ったからだ。

妹は、さまざまな支援の中で生活を送っている。支援学校では、僕たちのような中学校とは異なり、

身体や知能などにハンディキャップを抱えている子達が通い、日常生活の中で必要な事などを練習したり、身につけていく事が多い。いま、妹は算数で数字をかぞえたり国語の授業で、色分けや、ひらがなをなぞる勉強をしている。この間、お母さんと妹が手をつないで信号が、かわるのを待っていると「赤は止まれ。」と妹が言った。今まで色の認識ができず、どれが赤なのか分からなかった妹が、しっかり物を見て何色なのかを理解し答える姿が、とても嬉しかった。

夏休みを使って、一日妹の通っている、放課後等デイサービスにボランティア体験をさせてもらった。そこでは僕の知らない妹を、たくさん見ることができた。デイサービスは学校後や、長期休み、祝日などに利用する事ができ、利用者の子供たちも、小学校一年生から高校三年生までいた。僕の中では、一日のんびり過ごしたり、楽しく遊んでいるものだと思っていたが、僕も偏見を自然ともっていたのかもしれない。子供達は、自分の支度が終わると、支度が出来ない子の手伝いをしたり、先生の手伝いをしていた。その後、事業所内で、ペットボトルやアルミ缶のリサイクル作業をおこなっていて、ラベルはがしや、缶を洗う係、つぶす係と分担して一人一人が、自分の役割をはたしている姿に、おどろいた。作業が終わると、近くの公園の花だんへ行き、水やりや、雑草をぬいたりと花だんの手入れをしていると、散歩中のおばあさんが、僕に声をかけてくれた。「ここにあるお花たちは、この子達が作業をした内職で集まったお金の中で、種を買って植えてくれたの。毎日、手入れをしてくれてきれいに咲いているお花を見ると心が落ち着くの。」とにこにこしながら、話をしてくれた。今まで僕は「健常者の人たちが、障がい者を支えている。」と思っていたけれど、その考えは全くもって違うという事を、おばあさんに気づかせてもらった。普段、人に支えてもらう事が多い妹だけど、

その妹が一生懸命、育て手入れをした花を見て、喜んでくれる人がいる。妹も誰かを支えている事が、ボランティアを通して伝わった。

今回の体験も含め、「人権とは何か。」と考えた時、僕は人と人が支え合っていく事が、大切な事だと、思いました。僕自身の日常生活においても、支えてくれる家族がいて、「いってらっしゃい。」と声をかけ、見守ってくれる地域の方たち。学校での集団生活や部活動での練習を通して、たくさんの人たちに支えてもらっているからこそ、僕の生活は成り立っている。その感謝を忘れてはならないと思うし、伝えていかなくてはならないと思う。僕が支えてもらっているように、僕も誰かの支えになれるように、今は学業と部活動を頑張りながら、そこから大きい成果を得ていけたら、今よりもきっと、人権の重要性に気づく事が、出来ると思います。

特別賞

（清水エスパルス賞）

偏見は怖い

森町立森中学校
三年　萩　原　大　惺

僕は、人口二万人弱の自然豊かな町、森町に住んでいる。森町には水のきれいな川が流れていて、夏には水遊びをする人たちやバーベキューをする人たちで賑やかになる。森町には大きな工場がいくつかあり、外国から沢山の人が働きに来て森町に住んでいる。そのため夏になり、暑くなると外国人も川でバーベキューや水遊びをして楽しんでいる様子をよく見かける。そんなこの町でおきた外国人と僕とのある出来事を紹介したい。

弟と川遊びをしていた時に弟が、

「あれ、みて。」

と外国人のところを指差して僕に言ってきた。弟が僕に指を差して伝えたかったのは外国人の男性にタトゥーが入っているということだった。僕はそれに気づくと無意識に一歩引いてしまった。なぜなら、その時僕の中にはタトゥーというと格闘家や映画ででてくる犯罪者に入っているというイメージがあり、とても怖かったからだ。

弟と僕は、すぐに父のところへ行って、外国人の腕にタトゥーが入っていたことを言い、早く帰ろうと必死に訴えた。あまりの必死さに父は驚き、笑っていた。笑った後に父は、外国の人は、普通の人でもおしゃれでタトゥーを入れたりするのが普通だという事を教えてくれた。そのほかにも、タトゥーを入れている人が怖い人というわけじゃないことや、日本でも最近はタトゥーを入れる人が多いということなど、タトゥーについてたくさん説明してくれた。僕は父の説明を聞いて、とても安心した。

その後、水遊びを存分に楽しんだ後、帰宅しようとしたときに外国人の家族がなにか困っている様子が見えた。なにに困っているんだろうとすごく気になったので父にそのことを言ったら、父が外国人の家族に声をかけた。外国人はカタコトの日本語で僕の父になにかを一生懸命伝えていた。英語も使いながらなんとかコミュニケーションをとっていた。何分かすると、父は

「少し待ってて。」

というジェスチャーをしてもどってきた。父になにがあったのか聞いてみると、車のバッテリーが切れて車が動かなくなってしまい困っているらしい。父は、「今から助けるからちょっと手伝って」と僕に言ってきた。僕はうなずき、すぐ父と家に帰った。

僕と父は、自家用車で外国人のもとへ行き、バッテリーを繋いで充電できるように手伝った。しばらくすると外国人の車にエンジンがかかり、車が動くようになった。僕はすごく安心した。外国人の家族も安心したようで、僕と父にすごく感謝をしてきた。少し話をしてみると、とても明るくて優しい人柄の人たちだった。僕は勝手に怖い人と考えてしまっていて申し訳なかったと心の中で反省した。その後、外国人の家族は深く頭を下げ、車で帰っていった。人を助け、父は気持ちよさそうにしてい

たが、僕はそんな気持ちになることはできないまま、家に帰った。

最近、外国人差別の問題のニュースをよく聞くが、そのニュースを聞くたびにとても心が痛くなる。なにも悪いことをしていないのに、外国人だからとアパートの入居を拒否されたり、サービスを受けられなくなったりするのはおかしいとすごく思う。国籍が違っても人間であることに変わりはないからだ。言語や文化、宗教の違いから差別されたり、偏見が生まれたりしていると聞いた時、そんなことで差別や偏見が生まれるなんてくだらないと思ったが、同時にあの出来事を思い出した。あの時僕も文化の違いによる偏見をしていたんだと思った。他人が差別や偏見をしているということを聞くと、くだらないと思ったり、疑問に思ったりすると思うが、自分も無意識にしている可能性があるということを知ってほしい。自分が信じていることが事実なのかをもう一度考える必要があると思う。

外国人への差別や偏見の問題だけでなく、僕の経験である、タトゥーへの偏見や差別も日本では解決しなければならない大きな問題だと思う。タトゥーが入っている人は温泉やプールへの入場を禁止されていたり、タトゥー＝怖いというイメージをもっている人が多くいたりする。そのため、タトゥーを入れている人からしたら生きにくい国になってしまっている。一人一人の人権を守るためにもそんな世の中ではいけないと思う。そんな世の中を変えるためにも、一人一人の差別や偏見の考えを無くさなければいけない。

しかし、人がずっともっている差別や偏見の考え方をやめろと呼びかけてもなかなか難しいと思う。自分が信じていることを変えるためには、実体験が必要だからだ。経験をすれば、考え方は変わると思う。でもみんながあのような経験をすることは多分出来ない。だから僕は、この経験をみんなに伝

えることで、世の中にある、差別や偏見の考え方を少しでも無くしたい。

特別賞

（ジュビロ磐田賞）

特別は特別ではない

浜松市立庄内中学校
三年　徳　増　　藍

みなさんは、『ユニークフェイス』という言葉を聞いたことがありますか。また、その言葉の意味を知っていますか。私がその言葉を知ったのは四年前、コロナウイルスによって、学校が休校やリモート授業になった頃のことでした。

私の母は外出することが嫌いでした。大体の買い物はネットで済ませ、宅配も置配を利用して、他人と会う時間や機会を極端に減らして過ごしていました。世に言うコミュ障なんだろうぐらいにしか、思っていませんでした。母が一人で出掛けるのは病院くらいで、いつも帽子を被り、マスクをして出ていくその姿は不審者のようでした。

しばらく経つと世間はコロナウイルスの影響により、マスクをつける人々で溢れかえっていました。あんなに外に出なかった母が、父と一緒に外出するようになりました。

「みんながマスクをしてくれるから、私がマスクをつけていても目立たないんだ。」

母が外出を嫌がる理由は、一人だけマスクをしている空間だと、目立ってしまうからと言うもので

した。

ここで誰もが思うことですが、そもそもマスクなどせず外出すればよかったのではないかということについてお話しします。

母は生まれつき、脈管奇形という難病をもって生まれてきました。母の病気は頭から肩にかけてのリンパ管が奇形で、身体や頭の形が歪んでしまっています。それはもちろん生まれてからずっとで、小さな頃から知らない人に指をさされたり、直接言葉で攻撃されたりと辛いものだったと母は言っていました。

そんな幼い日の記憶は、いつの間にか心に深い闇をつくり、次第に前を向いて歩けなくなっていきました。下を向いていれば顔を見られることがなく安心できたそうです。

母の病気は身体の成長とともに悪化し、身体の歪みもひどくなり、下を向くだけでは外に出られなくなりました。中学で新しく出会うクラスメイトに対しても病気を指摘されるのが怖く、ほとんど休んでしまったそうです。そんな話を休校の頃、初めて母から聞きました。

私の知っている母の姿ではありませんでした。私に負けないぐらい元気で、強くて、頼りになる母ではありませんでした。母がずっと抱えて生きてきた闇は、私の思っていた以上のものでした。外に出ないのも、人に会わないのも全て、自分の顔を隠したかったからで、コミュ障だなんて思っていた自分が恥ずかしくなりました。

現在、マスクは半分程度の人が外し始め、コロナ前のような日常を見かけることもありますが、母は暑い夏も相変わらずマスクをつけて父と出掛けていきます。一番の理解者である父が側にいるのな

ら、きっと大丈夫でしょう。

母のように、顔や身体が病気や怪我によって変形したり、痣や傷のある人のことを『ユニークフェイス』と言います。母は言っていました。

「見たことのない姿、形に驚いてしまうことは当然だと思うよ。驚いていいんだよ。でもそれは個性的なだけで、例えば髪が虹色の人を見たときや、耳に大きな穴のあいたピアスをしている人を見かけたら驚くのと一緒で個性だと思ってもらえたら嬉しい。だから全ては理解できなくても、病気のことを質問してくれるだけで、とっても嬉しいんだよ。」

と。母の言葉で私は少し分かったような気がしました。特別な行動でなくていいということを。買い物袋で手がふさがっている人に、ドアを開けてあげるのも、転んでしまった子に声をかけてあげるのも、障害やハンデがあるからやってあげるのではなく、目の前の人が困っていたからお手伝いしただけで、私にできることだったから、協力したいと思っただけだと言うこと。誰に対しても同じでよかったんだと考えさせられました。無理をする必要なんてなくて、できることをするというこんなにも小さなことが、みんなの心を温かくし、心の輪を広げる小さな魔法なんだと思いました。

特別賞

（藤枝ＭＹＦＣ賞）

「捉われない」にとらわれない

静岡大学教育学部附属浜松中学校
二年　磯　貝　咲　歩

「見た目にとらわれない」ＳＮＳでも、学校の講座でも、道徳の教科書でも、散々言われてきました。全く同じ文字でなくても、このような言葉を聞いたことがあるのではないでしょうか。「人権」と聞いたとき、最初に思い浮かんだのは障がいがある人との壁や偏見についてでした。なぜなら、他の人よりも障がいが身近にあると思ったからです。通学中、駅のホームで白杖をついている人を見かけます。バスでは、車椅子を使っている人が乗ることもあります。毎日、発達障がいを持つ弟と喧嘩をしています。こんな日々を送っているからこそ、障がいがある人が世間でどのような扱いをされているのか気になり、調べてみることにしました。

するとインターネットで、あることで賛否が分かれている、というような記事を見つけました。それは、「障がいが個性か」ということです。詳しく見てみると、「総理府編　『障害者白書　平成七年版』は、『バリアフリー社会を目指して』と題して、社会環境において障害者の生活上の支障となる障壁の一つに〝障害（者）観〟の問題があるとして、『障害は個性』という障害者観が広まっている

ことを取り上げ、次のように記している。『我々の中には、気の強い人もいれば弱い人もいる、記憶力のいい人もいれば忘れっぽい人もいる、歌の上手な人もいれば下手な人もいる。これはそれぞれの人の個性、持ち味で、それで世の中の人を2つに分けたりはしない。同じように障害も個人がもっている個性の1つと捉えると、障害のある人とない人といった一つの尺度で世の中を二分する必要はなくなる。』」と書かれた白書をめぐって賛否を含め、いくつかの意見が新聞の投書欄に記載された、というものでした。このサイトでは「『障害は個性』という言葉には、一人ひとりの違いを認め、障害を特別視しないで受け止めようという意味がこめられているのだと思います。その点では、なんとなく納得できるような妙に説得力のある言葉のようです。しかし『障害は個性』という言葉には障害（者）観にかかわる重要な問題が含まれており、もう少しよく考えてみるべきことではないかと思います。」と言う意見が書かれており、「個性」という言葉の意味や、「障がいは個性」ということの問題点についても取り上げられていました。

これを読んで私は、世間は「捉われない」ことにとらわれすぎている、と感じました。なぜなら、本当に障がいを特別視しないようにするのなら、障がいは個性だなんて訴えなくてもいいと思ったからです。「とらわれる」という言葉には主に3種類があり、捉われる、囚われる、捕らわれるがあります。捉われるは、思考や認識に束縛されること、囚われるは、拘束されて自由に動けないこと、捕らわれるは、逃げようとしていたものが捕まえられることを指します。どれも似たような言葉ですが、固定概念などにとらわれると書くときは「捉われる」と書きます。今までを振り返って、私も「捉われない」ことにとらわれていたことがありました。それは、小学生のときに支援級の友達と接したと

きのことです。私の小学校では、普通級と支援級に分かれています。小学六年生のときのある昼休み、たまたま支援級の子が私のクラスで過ごしていました。しかし、私のクラスにその子が来たのがその日が初めてだったので、みんな接し方に困っており、誰も話しかけていませんでした。私はそのとき、みんなと違うことに捉われたらだめだと思いたくさん話しかけましたが、その子は困ったように少し嫌そうな顔をしていました。今思い返してみると、きっとその子は私が気を遣って話しかけたのを分かっていたから嫌そうにしたのだと思います。私がしたことはみんなと同じようにしたのではなく、特別扱いだったのです。その子は本当は誰かに話しかけられたかったのかもしれません。けれど、きっと素直に、純粋に会話を楽しめる人と話したかったのだと思います。この経験から、「特別扱いしないようにしよう」と意識しすぎるあまり、逆にそのことにとらわれてしまったら一人の人間として尊重することができていないと学びました。

人権作文を通して、私が発達障がいを持つ弟と姉弟喧嘩をしているのは、弟を一人の人間としてみているからだと気づきました。私が弟を障がい者として哀れんでいたら本気で喧嘩なんてできないと思うからです。障がいがあることに捉われてはいけない、という考えに縛られていたら、いつまで経っても壁はなくなりません。障がいを持つ方も適切な支援を受けつつ、人権に守られることで、公平に、人間全員が一人の人間としてリスペクトできる、される社会になることを願っています。

特別賞

（アスルクラロ沼津賞）

人権とは？

伊豆の国市立大仁中学校
二年　村　上　　慶

人権とは、誰もが生まれながらにして持っている、人間として幸せに生きていくための権利です。私たちは自分の個性や能力を生かして働きたい、健康で文化的な生活がしたいなど、幸せに暮らすために様々な願いを持っています。

僕の姉は障害者です。ダウン症といい、知的障害や発育の遅れ、精神発達の遅れなどがあります。僕は姉と一緒に仲良く育ちました。大切な家族の一人です。ですが、障害者と聞くと、周りの人はどんな反応をするのでしょうか。僕はそれが気になり、母に今までの姉について聞いてみました。兄が通っている私立幼稚園に姉の入園をお願いしに行ったとき、障害を理由に入園を断られたそうです。そのため公立の幼稚園に相談に行きました。その幼稚園は入園しても良いけどお母さんが付き添ってくださいと言われてしまったそうです。当時姉が入園するとき僕は一才です。一才の子を連れて姉の付き添いに毎日行くのは難しく、とても悩んでしまったそうです。その時、偶然リハビリで一緒になった人に、市町村の福祉サービスを利用して幼稚園みたいに通える場所があると教えてもらいました。

その福祉サービスを使って幼稚園みたいに通うことが出来て本当に良かったと母は話していました。その後も小学校に入学するときも色々大変だったそうです。今、一番母が心配しているのが姉の高等部卒業後のことです。姉は高等部卒業後、就労継続支援B型の事業所に通うことになると思います。その場合、毎日通っても、月の工賃は一万円ぐらいになります。（通所する事業所によって工賃は違います）いくら簡単な軽作業しかできないとはいえ、月に一万円程度では少なすぎるなと僕は思いました。また両親が高齢になり、姉のお世話が出来なくなった場合、姉は施設やグループホームに入所しなくてはならなくなります。姉と同じ支援学校の友達のお母さんが、そのようなところに勤めていますが、今の現状は障害に対して、知識や理解のない人が介護者として勤めているところも多く、そこに入所している障害のある人たちがかなり辛い思いをしているため、自分の子供を入所させたくないと言っていたそうです。それを聞いて母はとても不安がっていました。僕はそのような事を聞いて障害があるということだけで、色々と厳しい世の中だなと思いました。人権は人間として幸せに生きていくための権利なのに、これで姉は幸せを感じられるのでしょうか。つらい思いをせずに安心して暮らせるのだろうか？と思いました。

僕は小学校を卒業するまで「ゆずりんず」という障害のある人達が集まったダンスグループに姉と一緒に入っていました。二才ぐらいの物心ついた時からそのダンスグループに入っていたので障害のある人たちに自然と親しみがあります。障害のあるメンバーみんな、僕に対してとてもやさしく接してくれました。だから僕もとてもうれしく感じたし、みんなと楽しくダンスを踊ることが出来て幸せでした。そのため僕はダンスのメンバーを障害者という視点で見るのではなくて、とてもやさしい仲

間として今も見ています。しかし…一緒に活動していると色々な人の中には障害者だから…という視点で見ている人も多くいると感じます。僕にとっては、一緒に活動していたゆずりんずのメンバーは自分の学校の友達と同じで、元気な人もいれば、おとなしい人もいたし、推し活をしている女子高生や筋トレが趣味の優しいお兄さんもいます。健常者も障害者も、みんな同じ人間で幸せになる権利を持っているということを改めて感じ、この気持ちをこれからも大切に持っていきたいです。

姉は言葉は話しませんが、ジェスチャーや「〇〇する？」のように話しかけると反応してくれます。僕がにこっとすると、姉もにこっとしてくれるので、なんだか僕もうれしくなってしまいます。姉はとてもやさしい性格なので、周りの人を幸せにしてくれます。僕は姉と暮らして一切不自由を感じていません。一緒に暮らしていてとても賑やかです。僕は、障害があるだけで周りの人から別の視点で見られたくないです。姉は僕の大切な家族の一人です。将来的に家族と離れて暮らすようになった時に姉が幸せに生きられなかったらどうしようという不安があります。ですが、姉の幸せは僕が守りたいです。いつまでも幸せに暮らすことが出来ていつまでも笑顔でいてほしいです。

人権作文を書くことを通して、僕は改めて、みんなが幸せに生きていくための権利は障害者だとしても必ずあることを学びました。これからは「人権とは？」を常に頭に入れ、日々過ごしていきたいと思います。

奨励賞

差別とは偏見

吉田町立吉田中学校
三年　（匿　名）

「視野を広くもって。柔軟な考え方をしよう。」

母が私達によく使う言葉です。

以前、「僕がゲイであることです。」とＬＧＢＴＱを公表した芸能人のニュースを見ました。ＬＧＢＴＱという言葉は知っていたけれど、他人事だった私は特に関心を持てませんでした。

来年度から、私の学校でもジェンダーレスの取り組みとして、制服の変更が決まりました。少しずつ、身近なところでも変化が起きてきたからか、以前見たニュースを思い出しました。

ＬＧＢＴＱとは、性的少数者を包括的に指す言葉のことです。ＬＧＢＴＱの人の中には、親から「そろそろ結婚した方がいい。」と言われたり、友人から「彼氏いないの。」などの異性愛前提の話をされ、周りの人から理解をされにくいことに生きづらさを感じている人が多いそうです。

それだけではなく、「気持ち悪い。」や好奇な目で見られることもあり、自分を否定されて傷ついている人もいます。制服の変更など、少しずつ変わってきてはいますが、まだまだ世の中の普通は異性

との結婚、恋愛とＬＧＢＴＱを受け入れられていないと思います。

もしも私の友達にＬＧＢＴＱの人がいたら、私はどうするのだろう。と考えました。「気持ち悪い。」や「嫌だな。」とは思わないけれど、どう接したら良いのかが分かりませんでした。

自分と違うというだけで、今まで通りに接することができない。と思ってしまった考え方が、ＬＧＢＴＱの人に対する偏見につながるのではないかと思います。

もし私が少数者だったら、私の中の普通は同性愛で異性愛の多数者を「普通じゃない。」という見方をしてしまうでしょう。

普通というのは、あたり前のことではなく、多数派か少数派なだけなのではないかなと考えました。

私の弟には聴覚過敏があり、学校や出かけるときには、イヤーマフを使用しています。一緒に出かけていると、弟のイヤーマフをチラチラと見ている人がたくさんいます。物珍しい物を見るように何度も見てきたり、コソコソと「あれ何つけてるの。」と言っている人もいます。

私はその状況を見ていて、とても嫌な気持ちになります。弟は大きな音や高い音が嫌いで、イヤーマフをつけて、苦手な音から自分を守っています。目の悪い人が眼鏡を使うのと一緒だと思っています。

眼鏡をつけている人をチラチラと見るのだろうか。「何をつけているの。」と気にするのだろうか。と偏見の目で見られることに、不思議に思えてしかたがありませんでした。

しかし、私は弟のことを良く知っていて、イヤーマフと言う物がどういう物なのかを理解しているからこそ、嫌な気持ちになっていることに気付きました。

眼鏡はどんな物で、どういう物なのかを皆が知っています。だから誰でも受け入れられる。しかし、

イヤーマフは誰もが知っている物ではない少数派な物です。そのため、イヤーマフを知らない多数派からの偏見にさらされています。

これは、ＬＧＢＴＱと同じではないかなと思いました。私や、多数派の人はＬＧＢＴＱがどういうもので、どんな生きづらさがあるのかを理解しようとしていない。そのため偏見の目で見てしまい、余計に生きづらさを与えてしまっている気がします。

全てを理解することは難しいと思いますが、もし多数派の人が少しでも少数派の人の気持ちを理解することができるようになれば、今よりもきっと生きづらさを減らすことができるのではないかと思います。

偏見とは、自分と違うというだけで生まれてしまいます。その小さなきっかけが積みかさなっていき、差別になっていくのではないかと思います。

母が良く言っている、「視野を広く持って。柔軟な考え方をしよう。」というのは、きっと自分が全て正しい訳ではない。色々な人や、考え方がある。ということを伝えたかったのだと思います。

私は3年間、差別について考えてきました。吃音症や外国人差別、ＬＧＢＴＱや聴覚過敏。世の中には色々な人がいます。小学生の頃にも、「みんな違ってみんないい。」と言っている先生がいました。

今まで聞いているだけで、言葉の意味を深く考えてきませんでした。しかし、差別のことを考えてきて、母や先生の言っている言葉の本当の意味が分かってきた気がします。

これから先、自分とは違う考え方の人に出会っても偏見の目で見るのではなく、少しずつでも理解をして、受け入れることができる人になりたいです。

奨励賞

『助けて。』を言えない人へ

牧之原市立榛原中学校
一年　高　塚　利　々

「人権とはなにか。」私はこの作文を書く前、この意味が理解できていませんでした。インターネットを使って調べてみると、「一人ひとりが人間として、幸せになる権利」と書いてありました。そこで私は、いじめなどをうけ、自分が幸せだと思わない人は人権を奪われているのではないかと考え、おかしいと思いました。助けを求めたくても、「どうせ子供の意見なんて、」と考え、口をつぐむ人がたくさんいることを、調べる中で知りました。

私も似たように思っていた時期があって、子供の意見は言っても無駄だと思っていました。しかし、それを変えた出来事がありました。私は小学三年生の最後の方まで、放課後児童クラブに通っていました。ある日、同じ児童クラブの子と、いつものように喧嘩をしてしまいました。内容も思い出せないような、いつも通りのつまらない喧嘩でした。しかし、その喧嘩のことでその子と、その子のお母さん、そして私と、児童クラブの先生で話すことになりました。私のお母さんは、仕事の都合で遅い時間に迎えに来るので、いませんでした。私は、喧嘩した時の様子をありのまま話しました。しかし、

私と喧嘩をした子は、事実とは違うことを自分は悪くないかのように話し始めました。私は、戸惑いと驚きで何も話すことができませんでした。相手側のお母さんは、私の言っていることをうそだと決めつけました。この時私は、それでも先生はどちらの意見も聞いて、公平に判断してくれると信じていました。しかし違いました。私の意見は全く聞いてもらえませんでした。私は何度違うと言っても、

「うそはついちゃダメだよ。謝ろう。」

としか言われませんでした。話しているのは同じ子供なのに、そのことについて親が口を出すとなると、自分の意見が聞いてもらえないなんておかしいと思いました。他にも勝手に私のせいにされることもありました。

私はそれ以来、誰に相談しても、事実を話して助けを求めても、子供の意見だし無駄だと思うようになりました。

しかし、そんな私の思いを変える出来事がありました。私の家族が小学五年の夏ごろに私を除いて、コロナウイルスにかかりました。私は「一週間なんてすぐ終わる。」と思っていました。しかしお母さんが、コロナになって五日程経った夜中、体調が悪化し、私が部屋に駆けつけたら、脱水症状で過呼吸になっていました。私はこんな状況を経験したことがなく、何をすればいいのかわからず、看護師をしている叔母に電話で助けを求めることしかできませんでした。でもあの時の先生とは違って、子供の私の意見でも、真剣に聞いてくれました。私は、泣きながら

「どうしよう。お母さんがー。」

としか言うことができなかったのに、叔母は「大丈夫だよ。利々が元気じゃないとお母さんも心配し

ちゃうよ。」
とたくさん私に寄り添ってくれました。
私はこの一件以来、助けを求めることの重大さと同時に、助けを求める人に向き合う人がいることが何より大切だと思いました。そして、小さい頃からの「看護師になる。」という夢をよりいっそう達成したいと思いました。私は、「どんな患者さんにも寄り添いたい。」「誰かに相談されるほど、頼られ、信頼される人間になりたい。」と思うようになりました。
私のように、助けを求めることがなかなかできないといった人は、世の中にはたくさんいます。いじめなど、他人が勝手にした行為で、自分の人権を奪われる人もいます。それはおかしいと思います。私は人権の意味を理解し、改めて思いました。そのような人でも多く救うために「助けを求める勇気」「その人に向き合う人がいること」が大切だと思いました。子供だからなどと差別せず、向き合える人がいいなと思いました。それができれば、その人の人生を変えることがあるかもしれないし、新たな希望が見えてくることだってあるかもしれないです。助けを求める人に向き合う人が、少しでも身近にいるために、まずは私が、どんな人にも積極的に声をかけたりして、頼られる人になりたいです。そうして、少しでも人に無関心な人が関心を持ち、人に向き合える人になってくれるといいなと思いました。

奨励賞

誹謗中傷のない世界に

沼津市立門池中学校
三年　杉　原　帆乃花

今年の夏休みに、パリオリンピックが開催されました。オリンピックは、世界中からアスリートが集まり、スポーツを通じて競争を楽しむ場です。私も、時間が合うときや興味のある競技のときは、テレビの前で見入っていました。しかし同時に、誹謗中傷や差別といった様々な人権問題が浮かび上がる場でもあることを感じずにはいられませんでした。

中でも、ＳＮＳの急速な発達により近年世界中で問題が表面化している、特定の個人を標的にした誹謗中傷。このオリンピックでは、ＩＯＣが注意喚起するほどに深刻な事態となりました。

日本や日本人選手に関わるものでは、例えば、競歩選手の、個人種目を辞退し男女混合種目に専念するという決断をめぐって、多くの批判が集まりました。批判は、この決断に関わるものに留まらず、人格を否定する誹謗中傷に発展し、この選手は、「たくさんの方からの厳しい言葉に傷つきました。試合前は、余計神経質になり、繊細な心になります。批判ではなく応援が私たち選手にとって力になります。批判は選手を傷つけます。このようなことが少しでも減ってほしいと願っています。」と思

いを発信しました。彼女のこのメッセージは、これに先立つ柔道競技で選手の振る舞いや審判の判定に対して誹謗中傷が飛び交ったことも、発信の動機となっているのだと思います。選手のパフォーマンスが落ちるだけでなく、精神の健康にも悪影響を及ぼす可能性がある危険な行為であることを、大会期間中に選手自らが発信するのは、勇気がいることだったと思います。

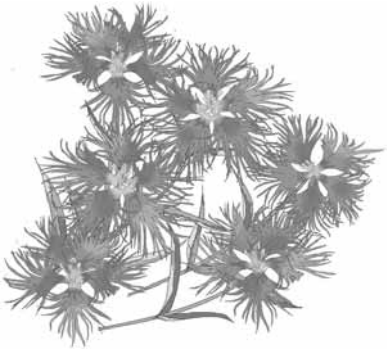
そもそもオリンピックの精神は、「スポーツを通じて心身を向上させ、文化・国籍などさまざまな違いを乗り越え、友情、連帯感、フェアプレーの精神を持って、平和でより良い世界の実現に貢献すること」であり、スポーツを通じて世界平和を目指す式典です。だから、私たちにたくさんの感動を与えてくれます。私自身、日常的にスポーツ観戦を楽しんでいるわけではないですが、オリンピックとなると、やったことのないスポーツでも熱くなって観戦しています。今回世界のあちこちの国で起こったこの誹謗中傷は、こうしたオリンピックの品を下げることにもなりました。

なぜ、このようなことが起こるのでしょうか。ＳＮＳには、非常にわずかな人の意見でも世界中に拡散されるという特徴があるため、一握りの人の発言が目に見えないところで広まり、本人の元にも半ば必然的に届くという状況が生まれ、それが当事者を追い詰めてしまうという仕組みがあります。ところが、そういった情報化社会は、もう止まることはありません。私たちは、インターネットとのかかわり方、付き合い方を考えていく必要があります。

私は、残念ながら誹謗中傷を完全になくすことは難しいだろうと考えています。多様性が主張され、いろいろな考え方が社会で認められるようになってきましたが、考え方、感じ方というのは人の数だけあり、まさに十人十色だからです。１００％一致するというのは不可能です。だからといって、何

でもかんでも言い放つのは、多様性や自由というものをはき違えています。確かに、新しい視点を得ることができるという点では、批判的な意見も必要で、必ずしも悪ではないのかもしれません。批判の中には、自分を成長させるものもあるからです。しかしそれは、罵詈雑言などの攻撃ではなく、飽くまでも「意見」として発するものでなければなりません。自分が言われたらどう感じるかを、一度立ち止まって考え、自分の発言に責任を持つことが大切だと思います。

今回のオリンピックを通して、改めて、人権というものがどんなに繊細で壊れやすいものなのかを考えさせられました。これからも、ＳＮＳに限らず日常の生活の中で、互いの考えや感情の表し方を考え続けていきたいと強く思います。幸せに生きる権利を踏みにじられる人が、少しでも減っていくように。



奨励賞

思い込みから人権を守るために

清水町立南中学校
二年　米山　翔

僕の祖父は一期一会を大切にしています。出先で様々な人と触れ合い、交流し、色んな人と話すのが好きで、年齢、性別、国籍問わず、日本語が話せない外国人旅行者などとも親しくなります。人と沢山関わることによって、自分の知らないことを理解できたり、色々な価値観をそれぞれが持っていることを知るのが楽しいそうです。そんな祖父ですが、僕が小学生の頃に不審者に間違われたことが二回あります。一度目は、朝の通学の時に僕と友達が、見送りに来てくれた祖父とジャンケンをしていたのを見た人が、「さっき不審者がいたから気をつけて」と、他の人に言っていたことです。二度目は、僕が友達と公園で遊んでいる時に、僕たちのことをカメラで撮っているのを見て不審者に間違われました。その頃の祖父は、白内障だったのでサングラスをかけ、コロナ禍だったのでマスクをし、寒いので帽子を被っていました。ただ、自分の孫と遊んでいただけなのに不審者扱いされたことに、祖父は大変ショックを受けたようでした。世の中に、沢山の情報が飛び交って、過敏になり過ぎてしまい、疑うことが当たり前になってしまったのが原因だと思います。安全と引き換えに、信頼が失わ

れてしまっている気がしました。

人権とは、誰もが生まれながらに持っている、人間の尊厳に基づく権利で、全ての人が平等、差別のない、自分らしく、社会のルールの中で明るい生活を守る権利です。人を差別し、その人の権利や自由を奪ってしまうことが人権侵害です。今回のように、人を見ただけでマイナスに判断し、その人のことを不当に扱ってしまうということです。サングラスにマスク、帽子という不審者を連想させる外観的特徴は、皆が考える不審者のイメージとして出来上がってしまっているので、偏見や思い込みで人権侵害につながってしまい、恐いことだなと思いました。自分と他人は違っていたとしても、それを受け入れて認め合うことが人を傷つけないために必要なんだと思います。

近年、困っている子供に声をかけられない大人が増加しているという調査結果を見たことがあります。約四人に一人が声をかけられないそうです。理由の七割が、不審者と誤解されたくない、二割はトラブルに巻き込まれたくないからだそうです。困っている子供に、「大丈夫？」と声をかけ、何か自分に出来ることはないかな、助けてあげたいなと思う人は沢山いるはずです。誤認されたくない恐怖と不安が、もやもやしながら、善意の行動を諦めさせてしまうのでしょう。僕は、少子化社会の中にいる子供として、この結果はとても残念な気持ちになりました。世の中や自分たちが過剰に意識し過ぎた結果なのかもしれませんが、どう対応すれば不幸な結果にならないか、安心して声をかけるにはどのような社会になるべきかもっと考えなくてはいけないなと思いました。

日本では当たり前に使う不審者という言葉、海外では使われないそうです。これは見た目だけでは犯罪者を見抜けるわけではないからです。防犯のために注意するのは人ではなく場所に基準をおいて

いるそうです。犯罪を犯す人はその場所を見て、入りやすいか見えにくいかで決めるので、逆にいえば、入りにくく見えやすい場所づくりを心がければよいことになります。そして、普段から人の顔を見て元気に挨拶することが、安心して生活をする理想だと思います。近所の人であっても交流がなければただの顔見知りです。顔見知りに声をかけるのは最初は勇気が要ります。でも、「おはようございます」や「こんにちは」と声をかけることで、顔見知りから知り合いになり、お互いを認識できます。また困っている人がいたら勇気をもって声をかける、お互い助け合う社会こそが、人権が尊重される社会なのだと思います。

奨励賞

思いやりの架け橋へと

富士市立岳陽中学校
一年　山　﨑　　大

（おいっ！だれか声かけろよ！）そこには見て見ぬ振りできない自分がいた。

僕は中学生になる前の平日の春休み、一人で日本平動物園まで行く計画を立てた。当日の朝、僕は珍しく早く起き、支度を素早く行い出発した。楽しみで楽しみで仕方がなかった。バスに乗った時、運賃がいくらかかるか心配だった。思ったより安い金額が表示されたので少しほっとしていたら、急に金額が上がり始めあせった。富士駅では電車が来たので急いで乗ってすぐに、座った。

東静岡駅のバス停の場所は下調べしておいたので、すぐに分かった。バスが来るまで三十分くらいあったので、ぼ〜と待っていた。すると、隣のバス停でサングラスをかけたおじさんとその娘らしき子が、大学生くらいのお兄さんと話をしていた。てっきり僕は家族だと思い、ぼ〜と見ていた。そしたら、そのお兄さんがいなくなったので、家族ではないんだなと思った。僕は暇だったので隣にある土日祝日専用の日本平行きのバス停を見に行った。すると、さっきのサングラスのおじさんが「すい

ません。誰かいませんか。」と大きな声で叫んでいた。そのおじさんは杖を持っていた。僕はその時、気がついた。（あっ！このおじさん目が見えないんだ。）そのおじさんと、幼稚園児くらいの娘の親子の近くを、大人が十人くらい通っていた。大人たちはみなおじさんの方をちらっと見ていたが、すーっと、通り過ぎていた。それを、僕は（誰か声かけろよ。）と思いながら、その状況を見ていた。だけど、誰も声をかけなかったので、（おいっ！誰か声かけろよ。）と心の中で強く思いながら見ていた。すると、僕はその思いだけで収まらなかったのか、気づくと「はい、何でしょう。」と声をかけていた。周りにいた大人のように、ただ通り過ぎていける状況でないと思い…無意識に声をかけていた。するとそのおじさんが「今、何時ですか？」と、聞いてきた。「十時です。」と僕は答えた。そして、「日本平動物園行きのバスは十時発だと聞いたのに、なぜ来ないのだろうか？」と言ってきた。僕は「これは土日祝日の時刻表です。今日は平日なので、あと二十分くらいで来ますよ。」と答え、僕はその親子を連れ、平日のバス停のところに一緒に行った。その後も、おじさんは、「僕、何年生なの？」と僕のことを聞いてきたり、おじさんの趣味なのかプロレスの話しなどをしてきたりした。おじさんは特にタイガーマスクが好きらしくずっとその話をしていた。バスが来たので一緒に乗り、僕は一番前の席に座り、外の景色を見て観察していた。さっきの親子は一番後ろに座っていた。日本平動物園に着き、僕はバスを降りた。そして、その親子を待った。バス停から入場門まで距離があったので、一緒に行こうと思ったからだ。そして、その親子と一緒に入場門まで行くと、おじさんが「ありがとう。係員さんを呼んできてもらえるかな。」と言ったので、係員さんを呼び、そこで親子と別れ、動物園の中に入った。「ありがとう。」と言われ少しうれしく、ほっとした。その後は、お目当てのホッ

キョクグマを見ながら一日楽しんだ。帰りも調べてあったので、計画通りに帰って来ようとしたが、昼食を食べすぎてしまい、最後のバス代が無くなってしまった。十七時の門限もギリギリだったので、吉原中央駅からはダッシュで走って帰って来た。家に帰って、家族団らんの中で、一日の事を話した。その中で親子のことについても話をした。すると、僕の行動に父母はとても驚いていた。姉には「嘘つけ。そんなことあんたに出来るわけないでしょ。」と言われた。だから、事実を再度語った。

今思えば、大学生らしきお兄さんは時計をちらちら見ていたので急いでいたんだと思う。そのような状況で動物園行きのバス停を聞かれても間違った時刻を教えてしまったのだろう。でも、他の人に比べたら、優しい人だったんだなと思う。もし、自分が困っているときに助けてもらえなかったら、僕はさみしいし辛いと思う。逆に僕がピンチになった時、優しく声をかけてくれる人が一人でも多くいたら、うれしいしありがたいなって絶対に思う。僕達も障害を持った人たちもみんな一生懸命生きているのだから、お互いに支え合いながら生きていかなければならない。世の中の人々全てが幸せに思えるそんな社会になってほしいと心から強く思う。そして、これからも困っている人を助けてあげられる優しい人間でありたい。

奨励賞

弟

南伊豆町立南伊豆東中学校
二年　臼井悠人

僕は人権とは何かよく分からなかったので、インターネットで調べてみました。「誰もが生まれながらに持っている権利」「人間らしく、自分らしく生きることのできる権利」など様々な表現がありました。

僕には、足の不自由な弟がいます。弟は生まれて二か月ほどで足が不自由になってしまいました。僕は、弟がどうやって生活していくのだろう、学校には通うことができるのだろうかと思いました。弟は病院やリハビリに通い、足に着ける装具や歩行器、車椅子を使い自分で歩いたり、当たり前に生活ができるようになりました。

僕は、弟が参加するパラスポーツの体験会に一緒に行く機会がありました。車椅子バスケ、電動車椅子サッカー、フライングディスクなど様々な競技がありました。実際に、車椅子バスケを体験しました。車椅子バスケのルールは、一般的なバスケットボールとほとんど同じです。まず、車椅子のタイヤを動かしたり、ブレーキを掛けたりする操作が難しかったです。次に、車椅子の操作をしながらドリブルすることは僕にはできませんでした。それから一般的な高さのゴールにシュートすることも

できませんでした。車椅子に乗って競技を体験して、本当の大変さに気づきました。僕の弟は、片足が不自由なだけですが、世の中には耳が聞こえない、目が見えないなどもっと大変な人がたくさんいます。自分にあるもので工夫したり、僕の弟のように、歩行器などの道具の力を借りたりしてできることを増やしているのだと思います。

僕はこのようなことを通して、車椅子を使った生活が不便ではないと考えるようになりました。パラアスリートの人たちだからこそできるスポーツがあります。車椅子など不自由さを助けてくれる道具をうまく使ってプレーするスポーツがあります。パラリンピックももうすぐ開幕するので、パラアスリートの人たちの活躍する姿を応援したいです。

僕の家の玄関には弟の装具があり、車椅子もあります。弟はそのような道具を使いながら、時間がかかっても、自分のことはひと通りできます。僕にとっても弟にとってもすべてが日常で、当たり前のことになっています。でも、そうではない人がまだまだたくさんいると思います。車椅子に乗った弟と買い物に出かけたときに弟が、

「なんでみんな僕のことを見るんだよ！」と怒ったことがあります。そんな弟の姿をみて障がい者だからという偏見が無い世の中になって欲しいと思いました。そのためにはまず自分から障がい者の人たちに寄り添えるような人になっていきたいです。僕の友達は弟をみかけると当たり前のように「元気か？」や「学校がんばったか？」とみんな声をかけてくれます。それが僕はとても嬉しいです。障がいのあるなしは関係なく、誰もがそんな考えを持てるようになれば必ず平等な世の中になると思います。皆さんもまずは自分から動いてみませんか？

奨励賞

私にできることから

松崎町立松崎中学校
一年　山本　美月

現在の日本は、高齢化が急速に進んでいると言われている。高齢化の対策としてたくさんの取り組みがなされている。日本は豊かな国の一つだが、その国を作ってきたのは、今高齢者と呼ばれる人たちだ。今になって、高齢化と言うのは差別なのだろうか。高齢者について考えてみようと思った。

私には一人暮らしのおばあちゃんがいる。八十歳のおばあちゃんは、今でもとても元気で明るい、自慢のおばあちゃんだ。でも、最近、足腰の調子が悪いと言うようになった。歩くのが好きで、仁科まで歩くようなおばあちゃん。この頃は、杖や手押し車で移動することが多くなっている。私は、そんなおばあちゃんを密かに心配している。この先おばあちゃんは年をとり続けていく。足も腰も今より少しずつ弱くなり、いつかは歩くのだって難しい状態になってしまうかもしれない。近所に住む私達の家に当たり前のように来てくれるおばあちゃん。これから先、私が会いに行く側になるのだろうか。そう考えると怖い気がする。おばあちゃんは強い人で、一人でも大丈夫と言っている。たまに元気のない姿を見てしまうと、もう年なんだな、とか大変そうだなと思ってしまう私がいる。

足腰の調子が悪いと言いながら、おばあちゃんは体を動かしたり、動いたりするのが好きだと思う。じっとしていることが苦手で、家事はもちろん、畑仕事や軽いウォーキングをしている。本当は、体のためにも少し休んだ方がいいと思うのが私の本音だ。心配もあるが、おばあちゃんは働きたいのだ。その理由は何となく感じていたけど、母が詳しく話してくれた。

おばあちゃんは、私のおじいちゃんである自分の夫と、四十九歳でお別れしている。それからのおばあちゃんは、母や母の二人のお兄さんを、女手一つで育てなければならなかった。母はまだ高校生だったし、大学へ行かせるためには、おばあちゃんが働かなければならなかった。おばあちゃんは長八美術館に勤め、そこで休む間も惜しんで一生懸命働く毎日だった。そのおかげで、母は大学へ行くことができた。定年が来て仕事を退職するとなったとき、仕事を辞めてからどう過ごせばいいか分からなくなってしまったそうだ。おじいちゃんが亡くなった悲しみを忘れるためにも働き続けていたのかもしれない。本当につらかったんだろうと思った。働くことは、おばあちゃんにとって大切なことだったと話を聞いて感じた。おばあちゃんの今までの姿を思い浮かべながらそう思った。

おばあちゃんが私の家に来ると、家事をしてくれる。体や動きを見ると、前よりも弱くなってると感じることは確かにある。でも、じっとして動ける時間が減るより、動ける時間を大切に使っているように見える。おばあちゃんは、いつもこう言ってくれた。

「ばあばは、みーちゃんたちとこうやって動けることが幸せなの。」

一人暮らしでは、家にいてもぼーっと一人でテレビを見ることが多い。私の家に来ると、何かしようと動くし、私や弟妹と一緒に動くこともできる。さみしさを忘れて、私達とこうやって過ごせる時

間は、おばあちゃんも私達も幸せなんだ。もしこの先、おばあちゃんが家に来れなくなっても、私達が会いに行って話したり、遊んだりすればいいし、介護が必要ならお手伝いをしようと思っている。

お年寄りの介護でストレスがたまり、暴力を振るったり、介護を放棄したりしているという問題を聞いたことがある。自分達だって、いつかは介護をする場合があるかもしれない。そうなったとき、放っておきたい、いらいらして手を出してしまうこともあるかもしれない。でも、同じ一人の人間として、介護が必要な人を支えていかなければならないと思う。今の私達の生活の中で、こういった「支え合い」といった精神がまだまだ足りてないんだと思う。

定年が延びて、七十歳で仕事をしている人もいる。働いているお年寄りを見る機会も多いと思う。誰もが年齢関係なく働けていることは、良いことなんじゃないかと思った。元気なお年寄りが増えているけど、何かしら助けが必要な人がいるのではないか。実際に手を差し伸べなくても、話をする、聞く、一緒にいることなら、自分にもできる気がする。

大事なことは、お互いが違いを認め合って暮らしていくことじゃないかと思う。年齢や様々な違いを認めるって、言葉では簡単だけど、実際は難しい。自分だけじゃなくて、周りの人たちに気を配るようになりたい。まずは、今の自分にできることを考えながら、無理なくやれることをしていく。お年寄りたちが元気でいられる社会にするため、支え合いの輪に入れるようにしたい。

奨励賞

障害という名の個性

浜松市立佐鳴台中学校
三年　髙　橋　奏　名

「よふひて」幼稚園の頃よく妹が発していた言葉だ。「よく見て」と言いたかったのだが、当時の妹は言葉の発達が遅かったため、上手く話すことができなかった。それに加え落ち着きもなく、すぐに走り回るため目を離せない子だった。言葉は三歳過ぎ頃まで全く話さず、幼稚園入園後にようやく少し話せる程だった。もうすでに言葉でのコミュニケーションをしている妹の同級生たちとは明らかに違っていた。二歳年上の私は当時幼稚園年長。そのため先生や友達の通訳係をしていた。発音が悪かった妹は、せっかく少し話せるようになっても何を言っているか理解してもらえなかったからだ。不思議と家族はみんな妹の言葉を理解していた。通訳係になった私は、辛い思いを何度もした。聞き取って相手に伝えることは何てことなかったが、友達からの「この子何言っているの」や「普通に話せないの」など決して悪気はないのかもしれないが、私の心には尖った言葉にしか聞こえない。言葉を理解していなかった妹は、さほど傷つかなかったかもしれないが、私は深く傷ついていた。時には、全く面識のない人にまで白い目を向けられることもあった。

心配した母は、妹を医師や保健師に相談していた。発達は一歳半遅れ。三歳の時に一歳半遅れしていることに、とてもショックを受けていた。診断は受けていなかったが、発達障害のグレーゾーン。「なるべくグレーを白に近づけるように頑張りましょう。」と、療育や言葉のトレーニングに通っていた。

妹が年中から年長に上がる時、「もう療育は必要ありません。とても成長したし、年長さんからは普通の子と同じ生活をして普通に小学校へ入学できる準備をしましょう。」と言われたそうだ。まだ少し発音にはぎこちなさは残っていたが、家族みんなで喜んでいた。

「普通の子」って一体どんな子だろう。私には疑問が残った。今までの妹は普通ではなかったのかと少し悲しい気持ちにもなった。中学生になった今の妹は、昔の面影など全くない。発音良く話すことができるし、落ち着きもある。勉強も絵も得意だ。昔の妹を知っている人にとっては同じ人間とは思えないかもしれない。ただ世の中はこれを「普通」と言うのだろうか。ずっと一緒に暮らしていた私にとっては、今も昔も何も変わらない普通の妹だ。ただ、話が苦手だっただけ。じっとしているのが苦手だっただけなのだ。その他は何も変わらない。それらが上手になったのが今の妹だ。

人は他の人とは少し違っていたり、何かが劣っていたりすると「普通」ではないと区別してしまう。特に発達障害は目には見えない障害のほうが多く分かりづらい。では、発達障害は「普通」の人より劣っているのだろうか。

次の人物には共通点がある。織田信長や坂本龍馬、アインシュタインやウォルト・ディズニー。これらの偉人たちには発達障害があったと言われている。日本を発展に導いた人物や素晴らしい発明。今でも多くの人が訪れる夢の国を作った人物。当時は発達障害という言葉はなかったかもしれないが、

果たして彼らが普通の人と比べて劣っていたのだろうか。もちろん、苦手なこともあったかもしれないが、普通の人にはない才能を持っていたのは間違いない。それなのに差別や心ない言葉を発してしまうのはおかしいと考える。どんな人も苦手なことや劣っていることはある。それでも皆一生懸命生きている同じ人間だ。

私は四年前の東京オリンピック・パラリンピックに心を打たれた。それは努力が美しかったからだ。健常者、障害者どちらも素晴らしかった。そこに区別などしてはいけないと感じた。

人には得意なこと、劣っていること、それぞれで支え合って生きていくことが大事だ。

決して劣っている部分を笑ったり陰口をたたくなどあってはならない。今もそれで苦しんでいる人もたくさんいるだろう。もう少し言われた人側の気持ちや相手に寄り添う気持ちが生まれれば、偏見や差別がなくなるのではないか。

普通の人などいないと私は考える。私も他の人と比べて不得意なこともたくさんある。家族や先生、友人たちに支えられて生きている。私が幼い頃の経験は決して無駄なことではなかった。嫌な気持ちを持つこともたくさんあったが、それ以上に大切なことを学ぶことができたからだ。完璧な人間なんて世の中に一人もいないのだから、個性を大切にし、お互い支え合って普通にこだわらず、一人一人を大切に生きていきたい。

奨励賞

支え合って生きていけば

掛川市立大須賀中学校
三年　山　下　志　帆

私の母は車椅子を使っています。しかし、足が不自由なわけではありません。母が車椅子を使い始めた事で私は、たくさんの方の優しさに触れると同時に、意識せずに自分が差別をしてしまっていた事に気がつきました。

母は慢性疲労症候群という病気を抱えています。人によって症状は少し違いますが、私の母は長時間歩くなど無理をしてしまうと夜に眠れなくなってしまったり、足や体が痛くなってしまったりして、何日も起き上がる事が出来なくなってしまいます。

私と弟はまだ学生なので、どうしても母や父に頼まなければいけない事があり、部活動や習い事の送り迎えをしてもらったり、学校の授業参観や三者面談に来てもらったりしなければいけません。私達のために動いてくれた母が、辛そうに

「動けなくてごめんね。」

と言った時は、申し訳ないという気持ちでいっぱいでした。

私が中学一年生になった頃、母は少しでも私達の負担を減らせるようにと車椅子を使いはじめました。もちろん、私も父も弟も車椅子を使う事に賛成でした。

しかし、いざ初めて出かけるとなった時、私は母を押して歩くなんて恥ずかしいと思ってしまいました。知り合いに会ったら、どう思われるのだろうと不安でした。この時の私は理解している「つもり」だっただけで、心のどこかでは障がいがある方、車椅子を利用している方を差別していたのだと思います。母と一緒に歩く事が嫌で、家族みんなで出かける時も一人で家に残る。ついていってもあまり話さない。母にとてもひどい事をしてしまっているとは分かっていても、車椅子を使っている母をなかなか受け入れる事が出来ませんでした。

そんな事をした私にも母はいつも優しく接してくれました。あまり母と話したくないという気持ちと、早く謝って前みたいに仲良く出かけたいという気持ちが混ざって、ずっとモヤモヤしていました。そんな私の考えを大きく変えたのは父に言われた言葉でした。

「支え合って生きていけば、みんな幸せなんじゃないかな。車椅子に乗っていても、お母さんはずっとお母さんだよ。」

この言葉を聞いた時、胸に何かが刺さったようでした。勝手に、車椅子に乗った母は前の母とは違うと思っていたのかもしれません。何があっても母は母なんだ。そう思うようになりました。

それから私は積極的に母と出かけるようになりました。ショッピングモールにも、スーパーにもついていきました。母と一緒に出かける事がどれだけ幸せな事なのかを知りました。

母が車椅子に乗っていると、どうしても困る事があります。しかし、困っていた時には周りの方々

が助けてくれました。電車や新幹線で出かけた時には、駅員さんが声をかけて電車や新幹線とホームの間の段差をなくすスロープを用意してくれました。エレベーターを利用しようと待っていた時には、先に待っていた方が譲ってくれました。他にもたくさんの優しい方々が声をかけてくれたり、手伝ってくれたりして、私と母だけでは難しい事や時間がかかる事もスムーズに行う事ができました。

母が車椅子に乗るようになってから、たくさんの方の優しさに触れてきました。きっと勇気を出して声をかけてくれた人もいると思います。困っている誰かを手伝おう。助けよう。と思う気持ちはとても素晴らしいです。私もそんな人になっていけたらいいなと思います。

奨励賞

思いやるということ

森町立森中学校
三年　森　田　健　心

僕は、障がい者を特別視してはいけないと思っています。この世に生きるすべての人には必ず違いがあります。違いには性格や能力などさまざまなものがあり、すべてが同じ人などいません。違いの大きさが違うというだけのことで、なぜ障がい者が差別をされなければいけないのか疑問に思います。なぜなら、障がい者だって人権を持ち、健常者となにも変わらない人間だからです。

僕が小学校に通っているとき、一クラスの人数が少なかったため、複式学級でひとつ下の学年といっしょのクラスで過ごしていました。そのときのひとつ下の学年には、言葉の最初の文字を連発してしまったり、うまく発音できなかったり、どもってしまったりしてなかなかうまく話せない子がいました。当時まだ小学四年生だった僕は、吃音というものがあることを知らなかったので、僕は少し変わった話し方をする子というふうに思っていました。しかし、周りの子の中にはいたずらをしたり、ちょっかいを出したりする子もいました。だから、その子が発表をするときにその子が笑われたり、からかわれたりされないかすこし心配になっていました。そのことを親に話すと、その子には吃音という障

がいがありうまく発音できないことがあるということと、ちょっとした発達障がいをもっていることがわかりました。そのときに可愛そうだと思った僕は、その子の身の回りのことをしてあげてサポートをしてあげようとしていました。しかし、二学期の道徳の授業で、ある障がいをもった人が質問を受けて、「障がい者の身の回りのことをすべてやってあげるのは自己満足だ。障がい者の意思や意見を聞いたうえでどうすればいいのかを考えてほしい。」ということを答えました。ぼくは、はっとしました。自分が勝手に「手伝ってあげた」という事実に満足していたということ、そしてその子の意思を考えて行動していなかったことに気づいたからです。その子にも自分でできることややりたいこと、やってみたいことだってあったはずだということに気づくと申し訳なくなって仕方ありませんでした。だから、その子が嫌な気持ちにならないように、健常者と変わらない普通の態度で接するようにしました。課題があったときも、その子は苦労しながらも突破できたときにはとても嬉しそうでした。障がいを持った子だってなにかを達成したときは嬉しそうに笑うし、悲しいことがあったら悲しい顔をするというあたりまえのことに気づかされました。

それから何年か経ったあるとき、やまゆり園という障害者施設で起こった大量殺人事件についてのニュースを見ました。この事件では、施設に入居していた人が十九人も殺害され、施設職員や他の入居していた人が傷つけられました。ものすごく残酷で話を聞くだけで胸が詰まる悲しい事件です。そして、この事件の加害者でこの施設の元職員である植松被告は、障がい者は社会に不要な存在だから、安楽死させてしまえば世界平和につながるという過激な思想をもっており、それが動機でこのような残酷な犯行につながったそうです。ぼくは、このニュースを見たとき、あまりの理不尽さにショック

を受けました。さらに、この事件についてのインターネットの書き込みでは、この犯人の行動を称賛したり、同意したりする声が多数あったそうです。僕は、犯人を支持するような障がい者に差別意識を持つ人がたくさんいるということがとても恐ろしいものだと思いました。障がいをもつ人にだって意思があり、やりたいことがあり、家族がいます。残された家族の方々は、障がい者であるというだけの理由で殺されてしまったということに苦しんでいるそうです。障がいを持っているというだけで、人権も生きる権利も奪われてしまうのはとてもおかしなことだと思います。

僕は、この二つの出来事を通して、障がい者の人権について考えて命の大切さ、思いやりの大切さに改めて気付かされました。そして、障がいを持っている人の意思や意見を健常者がしっかり聞いて本人の考えを尊重できるよりよい世界にするために、人権の大切さや障がい者当人の意見などについてもっと発信し、健常者と障がい者が障がいという壁を超えて差別意識を持たずにわかり合うことができるようになるといいと思いました。

ひとりで悩まず相談してください。

〈人権相談受付窓口〉

○常設相談所

静岡地方法務局人権擁護課
（静岡市葵区追手町９－５０　TEL０５４－２５４－３５５５）
静岡地方法務局沼津支局
（沼津市杉崎町６－２０　TEL０５５－９２３－１２０１）
静岡地方法務局富士支局
（富士市中央町２－７－７　TEL０５４５－５３－１２００）
静岡地方法務局下田支局
（下田市西本郷２－５－３３　TEL０５５８－２２－０５３４）
静岡地方法務局浜松支局
（浜松市中央区中央１－１２－４　TEL０５３－４５４－１３９６）
静岡地方法務局掛川支局
（掛川市亀の甲２－１６－２　TEL０５３７－２２－５５３８）
静岡地方法務局藤枝支局
（藤枝市青木一丁目４－１　TEL０５４－６４１－１１５８）
静岡地方法務局袋井支局
（袋井市袋井３６６　TEL０５３８－４２－３５４５）

※以上の場所では、面接及び電話による人権相談を受付けています。

○電話による常設相談

こどもの人権１１０番＜０１２０－００７－１１０　フリーダイヤル＞
みんなの人権１１０番＜０５７０－００３－１１０＞
女性の人権ホットライン＜０５７０－０７０－８１０＞

○法務局ＬＩＮＥじんけん相談　検索ＩＤ：@linejinkensoudan

○インターネット人権相談

http://www.jinken.go.jp/

インターネット人権相談　検索

人権イメージキャラクター

人KENまもる君　　人KENあゆみちゃん

相談受付時間は、土曜・日曜・祝日を除く午前８時30分から午後５時15分までです。
インターネットによる人権相談は24時間受け付けています。
相談は無料で、法務局職員及び人権擁護委員がお受けします。
秘密は守られますので、ご安心ください。

こどもの人権 110 番

ぜろぜろななの　ひゃくとおばん
0120－007－110（全国共通・無料）

インターネット人権相談受付　　ＬＩＮＥじんけん相談

ケータイでも相談できるよ。左のQRコードをバーコードリーダーで読み込んで接続してね。

人権イメージキャラクター
人KEN あゆみちゃん

http://www.jinken.go.jp/

令和六年度後援団体

静岡県教育委員会
静岡県私学協会
静岡新聞社・静岡放送
ＮＨＫ静岡放送局
静岡市教育委員会
浜松市教育委員会
清水エスパルス
ジュビロ磐田
藤枝ＭＹＦＣ
アスルクラロ沼津

令和７年２月印刷
令和７年２月発行
発行者　静岡市葵区追手町９番50号
静　岡　地　方　法　務　局
静岡県人権擁護委員連合会
印刷所　静岡市駿河区中原746番の１
池田屋印刷株式会社

本作文集は、以下のＵＲＬからダウンロード可能です。
ＵＲＬ：https://houmukyoku.moj.go.jp/shizuoka/page000001_01703.html

禁無断転載
本作文集掲載作品の著作権は、コンテスト主催者に帰属しています。
広報紙掲載、学校教材で使用するなどの場合は、下記にご連絡ください。

連絡先　静岡地方法務局人権擁護課（TEL　０５４－２５４－３５５５）

人権イメージキャラクター
人KENあゆみちゃん

人権イメージキャラクター
人KENまもる君